
世界をしらない少女

まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を知らない少女

【コード】

N9060X

【作者名】

まり

【あらすじ】

狭山 辰徳（35）の前に突然現れたのは、髪をバサバサとなびかせ、ボロボロの服を着て痩せこけた女。

彼女は中学生の頃に亡くなった初恋の人だった。

死んだと思っていた人が突然現れたことに戸惑う辰徳…

彼女は中学生の頃に、義理の父に暴行につけ子供ができていたと告白
死を選び、山に行くが死にきれず子供を山の中で出産、山で子供を
育てたと言う。

そして彼女は辰徳にお願いをする

もう自分の命は短い、どうか子供を助けてほしいと。

山の中で育てられた少女、彼女は山の中だけがすべての世界…

戸惑う辰徳だが、少女を救いにむかう決心をする。

この世界を知らない少女と向き合う辰徳だが…

世界をしらない少女 壱

「ああ…もうこんな時間か…」

そうつづぶやきながら、僕は窓に目を向けた。

「真っ暗だな…」

時計は午後9時をまわっていた。

「また、おそくなったな、今日はここまで！」

僕はあわただしく机を片付け始めながら、大きなため息をついたあと、いつものように部屋をでると足早に階段をかけ降りる。

「あー、肩いてー」

そうつづぶやきながら、両肩をぐるぐるとまわす。

もう誰もいない会社の中は、何となく薄気味悪い…

「何でこのビルは、エレベーターついてないんだよ！」

いつものように、ブツブツともんくをつきつつ薄暗い階段をおりていく。

そして長い階段をおりていくと、いつも一階で僕を待っているのは、大きな一枚の鏡とその中に写る僕だ。

「今日も1日お疲れ様、また明日」

そう、鏡の中の自分に挨拶をして帰るのが僕の日課だ…。

僕の会社から自宅までは、車で30分程度の距離だが…。

街灯もない山道をはしっていると、この道には永遠に出口がなく、どこまでも続いていくのではないかといつも感じてしまう。

しばらく走り続けると、ポツンポツンと光が目飛び込んでくる、寂しいながらもキラキラと輝く町のあかりだ。

「ただいま…」

そう光につぶやくのも、いつの間にか日課になっていた。

光が見えてほどなく、僕の自宅も見えてくる、僕はいつものように車を車庫にまわした。

そして、いつものように、バックで車庫に入ろうとした時。

「ん…？なんだ…」

ミラー越しに、僕の目に飛び込んできたのは、車庫のすみに小さく丸まった黒い物体だった…。

「なんだあれ？」

薄暗い車庫の中では、ミラー越しにそれが何なのか確認する事はで

きない。

僕は仕方なく車をおりて、黒い物体の確認にむかった。

コツン、コツン…

静まり返った車庫の中に僕の足音が響き渡る…

コツン…コツン

ガサ…！

「えっ！？つわぁ！」

突然動き出した黒い物体に僕は思わず大声をあげる！

「きゃぁ
」

僕の声に驚いたように、黒い物体が声をあげた。

え…？女性の声…？

人なのか？

「だ、誰だ？」

僕の声に反応するかのようになり、黒い物体は立ち上がり、その姿はようやく人だと認識できひとまずほっとする。

しかし、こんな時間に人の家の車庫にもぐりこんでいたやつだ、僕は自然と拳に力が入った。

しばらく二人の動きがとまる…

「た…たつ…のん？」

先に声をあげたのは相手だったが

え……！い、いま何て……

得たいの知れない人影から聞こえてきた声に、背筋が凍った……。

たつのん……それは、僕がまだ中学生の頃に呼ばれていたあだ名。

聞きなれたあだ名……

しかし、そう呼んでいた人物はただ1人だけ……

いつも

笑顔で

飛び付いてきた

あいつ…

僕の…

初恋の…人

「たつのん…」

再び聞こえる声。

「や、やめろ！だ、誰だ！」

体から血の気がひいていく

聞き覚えのある声…

冷や汗が体を流れ落ちる…

心臓が今にも爆発しそうな勢いで鼓動を打つ

だって

だって…あいつは、あいつは、中学生の時に死んだんだ！

世界を知らない少女 式

僕は、ゆっくりと後退りをする…

それに、合わせるかのようにこちらにむかってくる人影！

恐怖で目がらそらせない…

やがて、僕の体は外の街灯に照らし出される。

そして…彼女も…。

「あ、あああ」

次の瞬間、僕の目に飛び込んできたのは、髪をバサバサになびかせ、ボロボロの服に身を包まれ全身痩せこけた女性だった。

「たつのん…」

僕の名を呼び続ける女性：

その姿は、まるでお化けのようだ！

「ふざけるな、お前誰だよ」

必死に声をふりしぼりながら、彼女を睨み付ける！

「わ、わた、私は……」

かすれた、とてもか細い声……

「私は、か、かなえ……です」

そう言った瞬間、彼女は泣き崩れていく。

必死でこちらをみながら、口を動かしている、きつと声にならないのだろっ……。。

かなえ…。

間違いない…彼女だ、中学生の頃に亡くなった彼女と同じ名前、
そして、かすれてはいるが懐かしい声…。

一体どうなっているんだ、目の前の彼女は幽霊なのか…。

世界を知らない少女 参

ゴクリと大きく息をのむ…

「う、う…うわぁ、う」

目の前で、かなえを名のる女性の姿に戸惑いを隠せない。

そんな僕の前で必死に涙をぬぐう彼女…

「か、かなえは…し、死んだんだ！君は一体何者なんだ！」

僕の言葉に反応するかのように、顔をあげ僕を見つめる。

「し、死んだんだ…やっぱり、死んだんだ…」

「…な、何を言ってるんだ！」

彼女が、ゆっくりと近くに歩みよってくる。

僕はその歩みと一緒に、一步一步後退りをしてしまつ。

「死んだん事になつてて、当たり前だよね……」

「えっ？」

「たつのんは、かわらないね……」

「……………」

何を急に……。

言葉がでてこない。

「さくらんぼ、よく一緒にとって食べたよね

」

「!?!」

僕はその言葉を聞いてハツとしてしまう。

確信するしかなかった…。
間違いない、かなえだ…。

僕の家の庭には、さくらんぼの気が植られていて、昔よくかなえと一緒に木に登ってたべていた…。

彼女との一番の思い出だ。

「う、嘘だろ…かなえ…お前、幽霊なのか？」

「そう、なりたかった…かな」

「何を言ってるんだ!?!」

頭の整理なんかできるはずがない、今この瞬間の現状だって受け入れられることも、理解することもできない!

落ち着く事だつてできないが、今僕の目の前には、かなえらしき人が立っている。

「と、とにかく…中に入らないか？」

僕は何を言ってるんだ！

「いいの？」

でも、このまま逃げるわけにもいかない。

僕はコクリとつなずく。

「わたし、幽霊かもよ…」

「そ、それを今から確かめるんだ！」

僕の言葉に彼女は、涙をためた目で少しだけ微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9060x/>

世界をしらない少女

2011年10月26日02時03分発行